

# 留学生が大学場面で必要とする機能会話

## —機能別・韻律の指標作成を目指して—

高村 めぐみ<sup>†</sup>

**【要旨】**本研究は、表層的に異なる語彙・表現を発話しても、同一機能であれば韻律的特徴には共通点があることを示すための一連の研究の序章にあたる部分である。最終的には「機能別・韻律の指標」を作成し、日本語教育での初級学習者に対する音声指導に寄与貢献することを目指す。まずはその第一歩として、本研究では、大学場面で初級日本語学習者がどのような機能を必要としているのかを明らかにするためにアンケート調査を行った。その結果、①相手に何らかのアクションを要求する機能、②自分の気持ちを伝える機能、③人間関係を円滑に進めるためのコミュニケーション機能、を主に必要としていることが示唆された。

**キーワード：**発話、機能、留学生、韻律指導

### 1. はじめに

話し手の「感情」を聞き手に伝える時、そこで選択可能な表現・語彙はいくつも存在する。どの語彙を選択するかによって、聞き手は話し手の年齢、職業、社会的地位といった位相のみならず性格なども推測することが可能である。一方で、どの表現・語彙を選んでも、同一の感情を表現するとき、韻律にはある一定の共通点が見られる（重野 2004, 中林 2008）。例えば「喜び」の感情を表す時は、「わーい」と言っても「やったー」と言っても、大きい声で、かつ高めに発話するという韻律的な共通点があるだろう。そして、母語話者同士であれば、聞き手は話し手の意図する感情を韻律からある程度は推測することができる。

韻律で聞き手が推測できるのは「感情」のみではない。「内容」や「機能」についても、韻律を手掛かりに、その種類を聞き分けることができる（高村 2016a, b）。先行研究を概観すると、まず内容については、テレビ番組の視聴者からの悩みに答える場面を取り上げ、同一話者による複数の内容（「慰め」や「主張」）の発話について、内容の種類ごとに韻律を分析したところ、「慰め」はゆっくりした速さで、ポーズを十分に入れながら話すという特徴があり、「主張」はポーズからポーズまでの一つの発話の持続時間長を長く、そして慰めよりも速く、かつ高低の抑揚をつけるという特徴があると述べられている（高村 2016b）。また、機能については、「すみません」という表現の3種類の機能（呼びかけ、感謝、謝り）による韻律の相違点を調べるために、拍ごとの持続時間長、ピッチ最高値、最低値、平均値、ピッチ幅を計測

<sup>†</sup> 関西学院大学日本語教育センター

※城生佰太郎先生の古希をお祝い申し上げます。また、このような場を与えてくださった方々にも心より感謝申し上げます。

本研究は「発話機能に相応しい韻律—「機能別・韻律の指標」の作成—」（平成28年度科学研究補助金基盤研究(C)課題番号16K02747 研究代表者：高村めぐみ）による助成を受けている。

し、機能ごとに韻律的特徴を分析したところ、1.「呼びかけ」は末尾音節の/e/が長くて高い、2.「感謝」は全体的に高い、3.「謝り」は低めで、どの音節も短い、という特徴があると述べられている(高村 2016a)。この先行研究は、話し手が全く同じ語彙・表現で発話をして、聞き手は、話し手の意図する機能を認知することができることを示している。但し、高村(2016a)では「すみません」の一語を扱ったにすぎないため、韻律と機能の関係を一般化するのには早急である。

これらを踏まえると、感情や内容と同様、機能についてもその種類ごとに韻律的な特徴があることが推測される。例えば、「謝罪」の機能を示す表現は「すみません」「申し訳ない」「ごめんね」など多数あげることができるが、どのような語彙・表現を選択しても、声は小さめで、かつ低めで話すのではないだろうか<sup>1</sup>。同一の機能に共通する韻律が存在することが明らかになれば、日本語教育の現場における韻律指導に大きく寄与貢献できると考える。現在、日本語教育の現場で機能の指導と言えば、友達に話す時と目上の人に話す時では表現が変わるというポライトネスについての教育、あるいは「依頼」の表現は「～ていただきませんか」ではなく「～ていただけませんか」であるといった表現の正確さを高める指導が主流となっている。もちろん、これらの指導も必要ではあるが、ある場面で、ある機能を発話するとき、どのような韻律で話せば相手に真意(つまり意図する機能)が伝わるかという「相応しさ」「適切さ」に関する教育は、ほとんど行われていないのが現状である。そのため、いくら「正しい」語彙・表現で話しても、韻律が相応しくないために、ミス・コミュニケーションが引き起こされる危険がある。機能に相応しい韻律が言語に普遍的な特徴なのか、あるいは個別的なものなのかを扱った研究は管見の限りないため、現時点ではどちらの特徴なのかについて言及することはできないが、日本語の個別的特徴であった場合、特に日本語学習を始めたばかりの初級程度のレベルの学習者は、機能伝達の場面で母語の韻律をそのまま使い、自分の意図する機能を正確に相手に伝えられない、あるいは伝えられたとしても「言い方がよくない」などと評価されるかもしれない。

それでは、ありとあらゆる機能を指導すべきなのだろうか。その前に、そもそも日本語にはいくつの機能があるのかというと、実は、「ある発話に対して、ある機能を割り当てるという基本的とも言える機能の判定が困難なもので、これという答えが出ていない」(松本他 2005)のが現状である。この現状を考えると、全ての機能の韻律的特徴を網羅的に記述し指導に生かすのではなく、特定の場面で特定の人物が使うことを前提に機能を選定したうえで、指導を行うのが妥当であると判断する。具体的には、本研究の結果を日本語教育の韻律指導に生かすために、大学場面で初級学習者が頻繁に使う機能に限定して分析を行うのが現時点では最善だと考える。そのために、まずは初級レベルの留学生が大学場面においてどのような機能を必要としているかを把握するべきだろう。ここでは、初級学習者がどのような機能発話を必要としているのかを調べる。そして、中級、上級学習者にとって必要な機能と比較することにより、初級学習者の特徴を明らかにする。

## 2. 調査方法

<sup>1</sup> これは話し手の「真の感情」とは無関係に発することができる。だからこそ「心の底では悪いと思っていないが『謝る』」ことや「心では泣いているが、友人を『祝福』する」ことができるのである。

2016年7月、関西学院大学において留学生41人を対象にアンケート調査を実施した。留学生の所属は学部留学生上級（以下「上級」）が7人、交換留学生中級レベル（以下「中級」）が19人、交換留学生初級修了レベル（以下「初級修了」）が15人である。上級は学部1年生で全員が進学前、日本に1年から2年間在籍していたため、滞日期間は1年半から2年半程度である。交換留学生の滞日期間は、中級、初級修了とも3か月、あるいは9か月である<sup>2</sup>。

アンケートは、調査用紙を配布して行った。質問項目は、松本他(2005)の示す58機能×2例=116<sup>3</sup>を参考に作成した。但し、松本他(2005)は、大学場面で必要な会話の種類収集が目的のため、韻律は一切考慮せずに選定している。そのため、「他者の意見について自分は賛成か反対かを述べる」のように、異なる2種類の韻律が混在していると予測される質問などの項目が含まれている。この一連の研究の最終的な目的は、機能による韻律の特徴の相違を探ることが目的のため、まず、韻律に焦点をあてて資料を選定すべきである。そこで、筆者とプロの俳優経験がある協力者（N氏、女性）の2人で松本(2005)の中から、韻律に特徴がありそうな項目を抽出した。次に、各機能の表現を数種類ずつN氏に発話してもらい、筆者の聴覚印象で韻律的特徴があると判断した30種類の機能（54の質問項目<sup>4</sup>）を最終的に抽出した。そして、それらをアンケート調査の質問項目とした（表1）。

表1 アンケート調査項目 一例

6	1	同情の気持ちを伝える	風邪を引き辛そうにしている友人に同情の言葉をかける
		Expressing sympathy	saying a word of sympathy to the person who got a cold.
	2	同情の気持ちを伝える	失恋した友人に気持ちは分かると伝えるなど
		Expressing sympathy	telling that you know the feeling to the friend who just got broken heart.
7	1	詫げる	提出物の期限が送れたことを教師に詫げる
		Apologizing	saying sorry to the teachers about the delay of your report.
	2	詫げる	誤って相手のものを壊してしまい、詫げる
		Apologizing	Breaking something by accident and apologize.
8	1	人に何かをするよう誘う・促す	図書館に行って試験のための勉強しよう誘う
		Inviting or urging someone to do something	urging your friend to go to the library and study with you.

質問は「あなたは今現在、大学生活に必要な以下の目的の会話を日本語で行うとき、どの程度、習得の必要性を感じていますか。」<sup>5</sup>で、留学生41名には「1.ほとんど必要を感じていな

<sup>2</sup> 半年間で1タームのカリキュラムのため、滞日期間は1ターム目の人は3か月、2ターム目の人は9か月である。

<sup>3</sup> 松本他(2005)では、例えば『事実・情報の確認をする』という1つの機能につき、『課題の提出期限・提出方法について教師に確認する』と『奨学金に必要な書類について自分の理解が正しいかどうか職員に確認する』など、の2例をあげている。

<sup>4</sup> 松本他(2005)では、一つの機能につき2つの質問項目が書かれていたが、今回、選定する際に、1つの質問項目しか抽出しなかったものがある。例えば表1の8「人に何かをするように誘う、促す」の1は「図書館に行って試験のための勉強しよう誘う」で、機能は「誘い」であるが、2の質問は「恋人に電話をかけるように誘う、促す」である。これは、相手に何かを「勧める」機能であると判断したため、「誘う」の機能としては扱わず、「誘い」の機能からは除外している。

<sup>5</sup> 交換留学生（初級修了）には英語版も添付した。

い」「2.あまり必要を感じていない」「3.少しは必要を感じている」「4.かなり必要を感じている」「5.非常に強く必要を感じている」の5段階での評価を依頼した。

### 3. 結果と考察

まず、留学生全体が必要と感じている機能の上位10位とレベル別の回答を、それぞれ折れ線グラフ、棒グラフに示す(図2)。これを見ると、まずどの機能も上級の数値が一番高いことがわかる。それは、必要最低限の日本語ではなく、ある場面で使うに相応しい機能表現する際、最も適切な日本語で話したいと考えているからだろう。また、中級の数値が一番低くなっていることもわかる。これは、中級学習者が機能会話を不必要だと考えているというよりは、初級のころに比べて日常生活で困難なことが少なくなった結果だと考えるべきである。

表2 習得の必要性を感じている機能(全体)

全体			評価
1	残念 1	不幸のあった友人にお悔やみの言葉を伝える	3.8
2	詫げる 2	誤って相手のものを壊してしまい、詫げる	3.6
3	詫げる 1	提出物の期限が送れたことを教師に詫げる	3.5
4	挨拶 1	朝、教師と出会う挨拶をする	3.5
5	同情 2	失恋した友人に気持ちは分かると伝えるなど	3.4
6	指示 2	チームリーダーとしてチームメイトに作業の指示をする	3.4
7	許可求め 1	教師に授業の欠席の許可を求める	3.4
8	依頼 1	自分の代わりに教師のところにレポートを持っていってもらうように頼む	3.3
9	申し出る 2	自分のやりたいイベントを学園祭で企画し、その責任者になることを申し出る	3.3
10	食事開始 1	友人の家で食事をご馳走になるときに挨拶をする	3.3

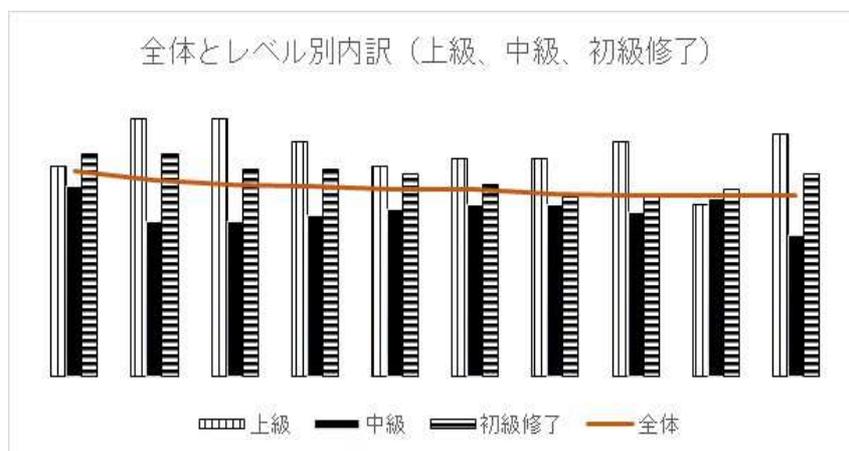


図1 習得の必要性を感じている機能の比較(全体、各レベル)

次に、上級、中級、初級修了、それぞれ必要性を強く感じているもの上位10位を示す。さらに、全体の結果と比べて各レベルにのみ含まれる項目、あるいは含まれない項目について分析をすることで、各レベルの特徴を考察する(表3~5、および図2~4)。

まず、上級について考察する。全体の結果には含まれていないが、上級に含まれている項目は、1位「感謝2」、4位「声掛け1」、5位「挨拶2」、8位「警告2」、9位「協力2」の5項目である(表3)。反対に、全体の結果には含まれているが、上級に含まれていない項目は、

1位「残念」、5位「同情2」、6位「指示2」、7位「許可求め1」、9位「申し出2」の5項目である(表2)。

上級にのみ含まれる項目について考察をすると、まず「感謝2」は、「財布を拾ってくれた人に感謝の気持ちを伝える」である。恐らく、「ありがとうございます」「すいません」などの定型表現は難なく言えるだろうが、それ以外の一言(「助かりました」「ご親切に感謝します」など)を場面や状況に合わせて話したいと思っている状況が窺える。これは、4位の「声掛け」も同様で、「おはよう」「元気?」などの切り出しはできるだろうが、そこから始まるスモールトークへの展開は難しい可能性がある。日本語母語話者同士でも特別な用事があるわけではないが、相手との円滑な関係を進めるために積極的に話を切り出したはいいが、言葉が続かないことはある。留学生も同様の理由から、「声掛け」の機能とそれに続く談話の習得の必要性を感じているのであろう。さらに、上級学習者の場合、「警告」を必要な機能だと考えている。これは、語学力を十分身に付け、社会の一員として見ず知らずの人に対しても注意をするような機能が必要だと感じている結果だと考える。

次に、上級には含まれていない5項目(「残念1」「同情2」「指示2」「許可求め1」「申し出2」)を見ると、「全体」では上位に入っている「自分の気持ちを相手に伝える機能」(「残念1」が1位、「同情2」が5位)は必要としていないのが興味深い。相手の気持ちを慮るような会話には、特に不便を感じていない状況が見えてくる。

表3 習得の必要性を感じている機能(上級) 上位10位

上級		評価	
1	感謝2	財布を拾ってくれた人に感謝の気持ちを伝える	4.7
2	詫びる1	提出物の期限が送れたことを教師に詫びる	4.7
3	詫びる2	誤って相手のものを壊してしまい、詫びる	4.7
4	声掛け1	朝、友人を見つけて声をかける	4.4
5	挨拶2	久しぶりに昔の友人に出会い、挨拶をする	4.4
6	食事開始1	友人の家で食事をご馳走になるときに挨拶をする	4.4
7	依頼1	自分の代わりに教師のところにレポートを持っていってもらうよう頼む	4.3
8	警告2	禁煙エリアで煙草を吸っている人に慎むように言う	4.3
9	協力2	友人に枚数の多いコピーを手伝ってもらうよう協力を求める	4.3
10	挨拶1	朝、教師と出会う挨拶をする	4.3

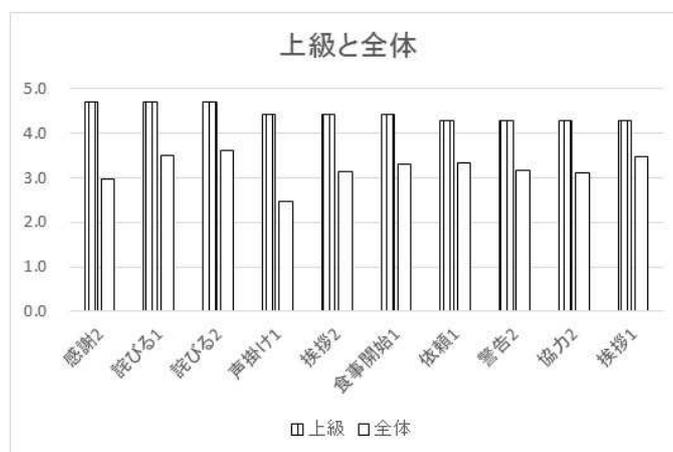


図2 習得の必要性を感じている機能(上級)

次に、中級について考察をする。全体の結果には含まれていないが、中級に含まれている項目は、6位「非承認1」、8位「承認1」、10位「警告2」の3項目である（表4）。反対に、全体の結果には含まれているが、中級に含まれていない項目は、2位「詫びる2」、3位「詫びる1」、10位「食事開始」の3項目である（表2）。

中級にのみ含まれる項目について考察をすると、「非承認1」（学園祭の催し物の友人の提案は承認されなかったということを伝える）、「承認1」（学園祭の催し物の友人の提案が承認されたということを伝える）の2つが入っているが、どちらも「伝聞」の機能であることがわかる。初級の時よりも、日本語力が上がり、周囲から伝言を頼まれる機会が多くなった可能性がある。「警告2」については、上級学習者同様、知らない人にも警告をするような機能を必要だと感じているものと思われる。

次に、中級に含まれていない項目は「詫びる1, 2」「食事開始1」である。「詫びる」機能は、特に日本に住む学習者にとって入門の時から遭遇する可能性が高い項目の一つであるため、中級レベルの学習者はすでに十分使いこなせるようになってきている。つまり、既習のため、今以上の習得は不要と考えているのであろう。また、「食事開始」については、日本では「いただきます」という定型表現があるというのは、日本語クラス、日本文化クラス等で教わってきたことであるため、特に問題なく使用できているのだろう。

表4 習得の必要性を感じている機能（中級） 上位10位

中級			評価
1	残念1	不幸のあった友人にお悔やみの言葉を伝える	3.5
2	申し出る2	自分のやりたいイベントを学園祭で企画し、その責任者になることを申し出る	3.3
3	許可求め1	教師に授業の欠席の許可を求める	3.2
4	指示2	チームリーダーとしてチームメイトに作業の指示をする	3.2
5	同情2	失恋した友人に気持ちは分かると伝えるなど	3.1
6	非承認1	学園祭の催し物の友人の提案は承認されなかったということを伝える	3.0
7	依頼1	自分の代わりに教師のところにレポートを持っていってもらうように頼む	3.0
8	承認1	学園祭の催し物の友人の提案が承認されたということを伝える	2.9
9	挨拶1	朝、教師と出会って挨拶をする	2.9
10	警告2	禁煙エリアで煙草を吸っている人に慎むように言う	2.9

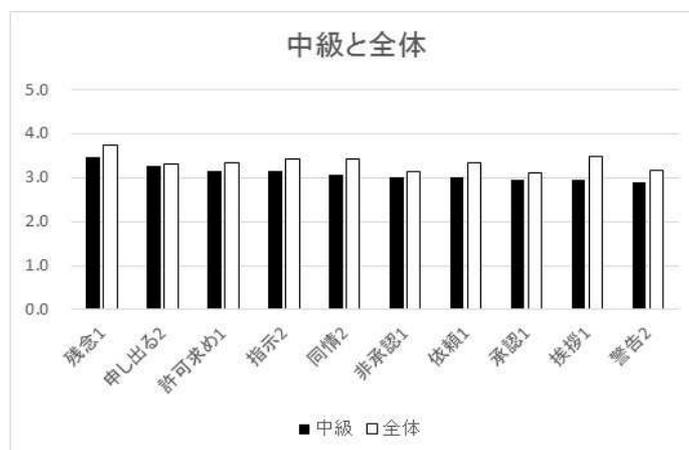


図3 習得の必要性を感じている機能（中級）

最後に、初級修了を考察する。全体の結果には含まれていないが、初級修了に含まれている項目は、5位「協力1」、8位「驚き2」、9位「協力2」、10位「挨拶2」の4項目である（表5）。反対に、全体の結果には含まれているが、初級修了に含まれていない項目は、6位「指示2」、7位「許可求め1」、8位「依頼1」、9位「申し出2」の4項目である（表2）。

初級にのみ含まれる項目について考察をすると、まず「協力」については、このレベルの学習者は、自分のために他人に行動をしてもらうように言うような場面で、機能会話の必要性を感じていることがわかる。特に、他人の力を借りる時などは、それを説明することを難しいと感じている。また、「驚き」については、自分の気持ちを相手に伝えることが十分にできておらず、そこにもどかしさを感じている様子が窺える。さらに、「挨拶」も入っているが、このレベルでも定型表現は使えるだろう。だが、「久しぶりに会った友人」となると、最適な話の切り出し方がわからないため、習得の必要性を強く感じているのだろう。

次に、初級修了に含まれていない項目に「指示2」「申し出2」が入っているが、どちらも自分がリーダー的存在としてふるまうときに必要な機能である。日本語力が十分でない段階であるため、周囲からもこのような役割は期待されておらず、機能の習得も必要だとは考えていない。また、「依頼」については、頼む相手によっては高いポライトネスが求められる。日ごろの学習者の行動を見ていると、そのような場面では、母語や英語で済ませているため、それが必要性を感じていない一因になっている可能性がある。

表5 習得の必要性を感じている機能（初級修了） 上位10位

初級修了			評価
1	詫びる2	誤って相手のものを壊してしまい、詫びる	4.1
2	残念1	不幸のあった友人にお悔やみの言葉を伝える	4.1
3	詫びる1	提出物の期限が送れたことを教師に詫びる	3.8
4	挨拶1	朝、教師と出会って挨拶をする	3.8
5	協力1	重い荷物を運ばなければならない時、友人に手伝ってもらうよう頼む	3.8
6	同情2	失恋した友人に気持ちは分かると伝えるなど	3.7
7	食事開始1	友人の家で食事をご馳走になるときに挨拶をする	3.7
8	驚き2	何かを見て、聞いてその驚きを人に伝える	3.6
9	協力2	友人に枚数の多いコピーを手伝ってもらうよう協力を求める	3.6
10	挨拶2	久しぶりに昔の友人に出会い、挨拶をする	3.6

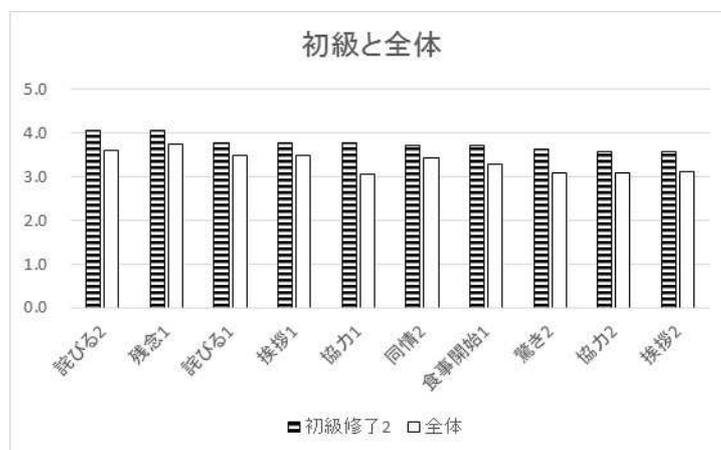


図4 習得の必要性を感じている機能（初級修了）

以上の結果を見ると、初級学習者は、①相手に何らかのアクションを要求する機能、②自分の気持ちを伝える機能、③人間関係を円滑に進めるためのコミュニケーション機能、を必要としていることがわかる。これらの韻律の特徴については、今後音響音声学的見地から分析、考察を加える必要がある。ここでは、単なる推測を述べるにとどめておく。まず、①については、相手への丁寧さを示すために、ややゆっくりした速度で話される、②については、感情と深く関係があるため、感情と韻律に関する先行研究が有益になる、③については、大きい声で、かつ高めのピッチで話すことが期待されている、と推論できる。

#### 4. まとめ

冒頭でも述べた通り、この研究は異なる表現・語彙を使って発話しても、同一機能には、同一の韻律的特徴があると示すことを目的としている。そして、日本語教育の韻律指導に生かすために、網羅的に機能の韻律的特徴を示すのではなく、大学場面で、初級学習者が頻繁に使う機能に限定して分析を行おうとしている。今回は、初級学習者がどのような機能を必要としているかを知ることが目的に調査を行った。その結果、特に初級では、自分の感情、気持ちを伝え、相手との円滑な人間関係を構築するきっかけとなる機能会話を必要としている。

今後は、1.音声資料を採取し、機能ごとに分類する、2.音声資料の信頼性を確保するため聴取実験と機能判定を協力者に依頼する、3.信頼性が確保された機能発話の韻律的特徴を抽出し、音響分析を行う、4.機能別・韻律の指標を作成する、5.その指標に基づいた初級学習者への韻律指導を行う、という順番で研究を行う予定である。そして、日本語教育における従来の「正確さ」に重点を置いた音声指導に一石を投じたいと考える。

#### 【参考文献】

重野純（2004）「感情を表現した音声の認知と音響的性質」『心理学研究』74: 6, pp.540-546.

高村めぐみ(2016a)「「すみません」の機能による韻律的特徴の相違」『比較文化研究』121, pp.219-227.

高村めぐみ(2016b)「発話内容による韻律的特徴の相違 —「慰め」と「主張」の発話を資料に—」『北海道言語文化研究』14, pp.1-9.

中林律子（2008）「音声による感情表出とその音響的特徴について—問い返し疑問文に表れる『嫌』『驚き』の感情を例として—」『ことばの科学』21, pp.121-142.

松本剛次・金銀美・梓沢直代・幸松英恵(2005)「大学場面で必要とされる会話の種類とその横断的推移についての一考察—日本語学習者の会話ニーズ調査の結果より—」『インターネット技術を活用したマルチリンガル言語運用教育システムと教育手法の研究』平成14年度～平成16年度科学研究費補助金基盤研究(B)(2)研究成果報告書

# Conversational Functions Needed in Japanese University

## Campus:

### Aiming for Prosodic Training by Function in Japanese Language Education

Megumi TAKAMURA<sup>†</sup>

This study serves as the starting point for a series of analyses to show that there are commonalities in prosodic features in speech even when superficially different terms or expressions are used, provided that they have identical functions. The eventual objective of this research is to develop function-specific prosodic indicators, and support oral training for beginner-level learners as part of Japanese language education. As a first step, the present study uses a questionnaire survey to identify the conversational functions required by beginner-level Japanese language learners within a university setting.

The results indicate that the following are required: 1. Functions to request a form of action in another party, 2. Functions to convey one's feelings, and 3. Communication functions to facilitate interpersonal relationships.

<sup>†</sup>*Kwansei Gakuin University, Center for Japanese Language Education  
1-155 Uegahara ichiban-cho, Nishinomiya city, Hyogo 662-8501. Japan  
E-mail: takamura.mg@kwansei.ac.jp*

